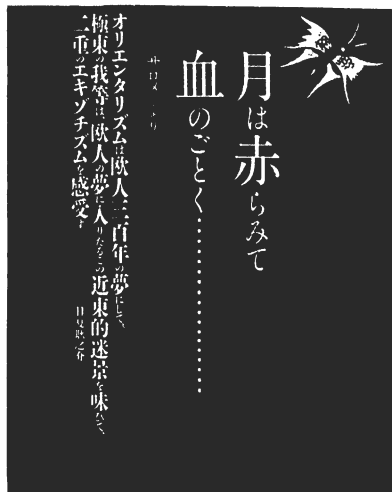


‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις ὁ βίος, ὑπόληψις.’

12号 1990.5.11

文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: ティラノザウルス 1990.4.24 渋谷ラ・ママ



はじまりの音楽がかかった。最近5回のライブが楽しくなかったせいか、心がかたまったこともなく、ぼさっと立っていると演奏がはじまった。すぐに自分の席に微笑みがうかんでくるのを感じた。微笑みもあさえることなどできなかった。うれしい！とびの中で声もあげた。はじめの一曲で熱い想いにかたがつつまわって、それがずうと最後まで、どんどん強くなっていった。一曲ごとに前の曲より極まっていて、私もそれにひっぱられてどんどん狂っていった。ロックンロールの究極だった。行き止まりまで行った。アンコールで4人がでてきて、T.REXの“GET IT ON”がはじまったのに、私は、ぼう、と放心して、しばらくはやっている人たちを見ることしかできなかった。ベースもドラムもすごいし、ヴォーカルの人の美しい声もすごかったけど、なによりも、なによりもギターが凄かった。あんなギターをそんなに聴けるものじゃない。ギターの人、天使が落ちて、悪魔になった瞬間の悪魔を思わせた。この日のティラノザウルスの世界は、覗いてくるのではなくて聴こえてくるものだった。濃厚な世界だった。

アラン・ブルームが「アメリカン・マインドの終焉」の「音楽」の章で、ロックンロールについて書いているとおりのかもしれない。(右のコピー参照) たしかにこの日のティラノザウルスには「強烈な喜び」といえるものが感じられた。大人になってからロックンロールに魅入られた私でさえ、ティラノザウルスのようなライブに角虫になると、現実が色あせて見えるのだから。

LIVE: BAND FRONT LINE 1990.4.22 パワーステーション

THE PILLOWS. なかなかきかせるステージ。歌詞がありふれていてインパクトがないが、それには人間としての成長が必要だから。Panic in the Zoo, 3月に「JANIS with the girls」のイベントで見たときよりはよかった。ギターがいいと思った。ティラノザウルスの、のろろした感じのステージ。ステージにもこの世と同じ時間が流れていた。夢を見ることができない。狂うことができたぶん、やっている方もそうだろうと思う。だから、ヴォーカルの人が観客に話して反応を求めようとするのだ。あれ、しらけるやな。もっとも、思いつきやってみようと思った。DEFYER. こどもっぽいハードロック。格好はばっかり。GYMNOPIEDIA. 3人のバンド。硬くて重いロックンロールで毒も華もある。ギター兼ヴォーカルの人の声もいいけど、ベースの人ドラムの人でもいい声。いい歌。この日、いらばんよかった。ステージで、ペチャペチャしゃべらず、演奏



GYMNOPIEDIAのライブ: 5/4 ロフト 5/12 LIVE STATION. 5/13 屋根裏 5/14 HEAVEN'S DOOR 5/16 JAM 5/18 20000 5/19 LAZY WAYS 5/24 アンティノフ 5/26 CHOCOLATE CITY
4月の!!! ライブ(記事以外) 4/13 DIAMOND'S SLAVE 新宿 ACB
4/18 ボイラーズ 四谷フォーバレー ↑このときいっしょにやったRUBY JANEも!!!

ロック・ミュージックは早熟のエクスタシーを提供する。その点で、こうした気分と手を取りあった麻薬に似ている。全力を尽くして何かを成し遂げたときに自然に感じる興奮——正義の戦いの勝利、恋の成就、芸術的創造、宗教的献身、真理の発見といったときに覚える興奮——を、ロック・ミュージックは人為的に誘発する。努力も才能も徳もいらなくても全員に、それらの成果を享受する権利が平等に分かち与えられている。しかし私の経験でいえば、過去に麻薬に溺れた学生は、かりに立直っても、何かに熱中するとか大望をいだくとかいうことがなかなかできない。あたかも彼らの生活から色彩が消え、すべてが黒と白の無彩色に見えるといったふうなのである。最初に体験した喜びがあまりに強烈だったので、終いに(あるいは、それが目的なのかもしれない)彼らはもはや喜びを求めようとしない。動作は別段おかしくないのだが、どこか無味乾燥で機械的だ。エネルギーは枯渇し、ただ生きてゆくという以外に毎日の営みから何かが産みだされるなどとは彼らは期待しない。善い生活とは喜びに満ちた生活であり、最も善い生活は最も喜びに満ちた生活であるという信念を、一般教養教育が教えてくれたはずではなかったか。ロックへの耽溺は、強力な対抗刺激がない場合にはとくにそうだが、麻薬に似た影響があるのではないかと私は懸念している。なるほど、いずれ学生たちはロック・ミュージックを卒業するだろう。少なくとも、ロックしか頭になんというような情熱はおさまるだろう。しかしそれは、フロイトのことばに従えば、「人間が現実原則(現実生活の要求に適合させる心的働き)を——味気なく、冷淡で、本質的に魅力に欠けるものとして、つまりはたんなる必要性として——受け容れる」との同じ道程にすぎないだろう。こうした学生が励むのは、経済学が専門職(学・歴・業・法)の勉強であり、彼らが脱いだマイケル・ジャクソンばりの衣装の下からはブルックス・ブラザーズ(土曜の高級紳士)のストッキングが顔を出すとだろう。彼らの望みは時代の先端を進み、快適な生活を送るというくらいのことだ。しかしその生活が虚しく偽りのものであることは、彼らが過去に置き去りにした生活と同様である。効き目の早い麻薬注射か、それともこうしたバツとしない生活か、こんな二者択一など存在しない。そんなことは一般教養教育が彼らに教えるはずのことである。しかし彼らがウォークマンを離さないかぎり、偉大な伝統のことばは彼らの耳に届きようがない。長いあいだ耳にあててきたウォークマンをはずしてみたとき、しかし、彼らは何も聞こえなくなったことに気がつくのである。

アラン・ブルーム
アメリカン・マインドの終焉
p.79~80

ティラノザウルスのライブ: 5/5 浅草草子座 GAROUE VIRUS



マイケル・モンローがDOOMを好きなの知ってる? ライブ決定!!! 今までにない本格的ツアー。追っかけてほしいな。都内 5/5 アンティノフ 5/3 EXPLOSION 5/5 ロフト 5/24 鹿鳴館。5/25は見たライブが3つも重なってしまった。DOOM, ZIGGY, ティラノザウルス。究極の選択を迫られたティラノザウルスに決めた。

LIVE: アンジー 1990.5.1 中野サンプラザ

間にアコースティックをいれた3部構成で2時間。開場開演時間の遅れも謝するアナウンスがあった。めずらしいこと! で、ライブの方はどうだったかという、フキちゃんからの一語に尽きる。居眠りがでちゃったよ、三ツクン! どの歌もみんなおなじにきこえた。まわりで跳んだり手をふりまわしている子どもたちがバカにみえた。ラジオ体操ですわ、あれでは。



MOVIE: 「JANIS」

4回観たが、そのたび「KOZMIC BLUES」を歌うジャンス・ジョーリンの姿にうたれて涙がにじんできてる。映画をウォークマンで録音した。インタビューに答えるジャンス・ジョーリンの談笑さが映像なしだとよくよく伝わってくる。自分に嘘をつかないし、他人にも嘘をつかない。「ブルースにはいつになにか談笑なものを聞いた」。「絵を描くことは自分を内に閉じ込めるけど、歌は外に出ることができる。だから解放された」とジャンス・ジョーリンは語っている。

5/5まで 新宿武蔵野館 (月)~(金) 9:10~